

# 保健師教育と保健師現任教育の現状と課題

沼田 加代

足利工業大学看護学部

## 要 旨

【目的】保健師教育と保健師現任教育の現状と課題を明らかとし、保健師育成のあり方を検討する上での基礎資料とする。

【方法】保健師教育と保健師現任教育の現状と課題に関する 28 編の文献をレビューする。

【結果】大学の保健師教育では実習から保健師活動を実践する上で必要となる知識や考え方、技術を学んでいた。新人保健師にとって大学教育における幅広い学習が卒業後に活かされることを伝える必要性の認識があり、保健師教育において卒業後を考慮した幅広い知識の提供の重要性が示唆された。保健師現任教育においては、新任者を等身大で理解した上でのレベルに合わせた職場風土の形成や現任教育が遂行できる職場環境づくりや情報共有の機会の確保、また研修の機会の重要性が示唆された。

【結論】保健師育成には地域保健活動および住民の生活の質の向上という目標をもち、大学教育から保健師現任教育までの連動した教育プログラムの構築が必要である。

キーワード：保健師，保健師教育，現任教育，人材育成

## I. はじめに

平成 21 年 7 月に保健師助産師看護師法および看護師等の人材確保の促進に関する法律の一部が改正された。この改正趣旨は、急激な少子高齢化の進行による医療ニーズの増大と多様化、療養の場の多様化等の変化に的確に対応し、国民に良質な医療、看護を提供していくために、「看護師等の看護職員の資質および能力の向上や看護職を一層魅力ある専門職とすることを通じた看護職員の確保」が求められていることであった<sup>1)</sup>。さらに、保健師・助産師の教育内容が見直され、平成 23 年 1 月には、保健師助産

師看護師学校養成所指定規則が改正された。この改正に伴い、保健師の教育内容の一部が「地域看護学」から「公衆衛生看護学」へ変更され、保健師国家試験受験資格取得にかかる教育がさらに充実した。この保健師教育の充実は、保健師に求められている役割に対応できる基礎能力を身につけることが目的とされている。

これまで、保健師教育は大学（学士課程）で学ぶすべての学生が履修してきた経緯がある。しかしながら、今日複雑な健康課題が顕在化するなかで、保健師活動もまた大きく変化している。こうした状況を踏まえ、学士課程において

は、看護師教育のみの教育課程とするか、保健師教育を含めた教育課程とするか、あるいは希望する学生が保健師教育を選択できる教育課程とするかは、各大学が自身の教育理念・目標や社会のニーズに基づき、選択できるものとなった<sup>1)</sup>。

また、地域における保健活動は、「地域保健対策の推進に関する基本的な指針」により実施<sup>2)</sup>されてきたところであり、保健師は地域保健対策の主要な役割を果たしてきた。その中で保健師は、日々進展する保健、医療、福祉、介護等に関する専門的な知識および技術、連携・調整に係る能力、行政運営や評価に関する能力を養成するよう努めることとされており、自治体は研修等により体系的に人材育成を図っていくこと<sup>2)</sup>とされている。しかしながら、現在、国や自治体等が実施している保健師の研修については、必ずしも系統的に行われていないこと等が課題とされている<sup>2)</sup>。

## II. 研究目的

本研究は、保健師教育と保健師現任教育の現状と課題を明らかにすることを目的とし、大学（学士課程）および保健師現任教育において社会のニーズに応え得る保健師を育成するためのあり方を検討する上での基礎資料とする。

## III. 研究方法

### 1. 用語の定義

本研究においては「保健師教育」を大学（学士課程）における保健師基礎教育とし、「保健師現任教育」を保健師資格取得後、現任で保健師の職務に就いている者を対象とした研修等による教育と定義する。

### 2. 文献検索

国内の文献を収集するために、国内の医学文献データベースである医学中央雑誌を使用した。検索語は、「保健師」AND「保健師教育」、「保健師現任教育」である。検索の限定として、文献の種類は原著論文であり、掲載誌発行年は最新の10年分とした。検索の時期は、平成27年8月である。

## 3. 文献の選別

### 1) 第1段階

検索の結果、医学文献データベースである医学中央雑誌からは、43編が検索された。その中から、文献のタイトルと要旨が、目的と異なる文献を除外した。保健師教育は、研究対象が大学（学士課程）における保健師教育とし、大学院教育が対象である文献は除外した。

最終的に、「保健師教育」に関する文献13編、「保健師現任教育」に関する文献15編の計28編の文献をレビューした。

### 2) 抽出文献の主な結果の検討

28編の文献の主な研究結果を要約し、一覧として示した。

## IV. 研究結果

### 1. 保健師教育の現状

保健師教育に関する文献は、研究タイトルおよび研究結果のキーワードから「大学における保健師教育」および「演習」、「保健師技術」、「実習」に関しての4つに分類された。さらに各分類の具体的な内容は表1に示した。

#### 1) 大学における保健師教育

大学における保健師教育<sup>3)</sup>では、「実習施設および学生との実習目的・目標の共有」が必要であり、「大学教育においても現場の地域保健活動および住民の生活の質の向上という目標から外れてはならない」と述べられていた。

#### 2) 演習

演習の報告では、地域診断演習における学生の学び<sup>4)</sup>と公衆衛生看護を学ぶ学生のためのケースメソッド演習の開発<sup>5)</sup>があった。地域診断演習では、「現地で直接学び理解する体験の重み」が得られ、学生は「地域に出てみて住民への聞き取りや活動への参加から保健師活動の理解」につながっていた。また、ケースメソッドでは教員が母子や成人、高齢者、精神などのケースについて「援助目標、ストーリー、健康課題を作成」し演習したところ、学生は「保健師活動のイメージが付き、課題解決や自己効力感も向上」した。

## 保健師教育と保健師現任教育の現状と課題

表 1 保健師教育に関する対象文献と研究結果の概要

分類	タイトルと文献番号	研究結果
大学	大学における保健師教育 <sup>3)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実習施設および学生との実習目的・目標の共有</li> <li>・ 実習施設との報告会の実施が必要</li> <li>・ 大学教育においても現場の地域保健活動および住民の生活の質の向上という目標から外れてはならない</li> </ul>
演習	地域診断演習における学生の学び <sup>4)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現地で直接学び理解する体験の重み</li> <li>・ 地域診断プロセスの理解の深まり</li> <li>・ 地域に出てみて住民への聞き取りや活動への参加から保健師活動を理解</li> </ul>
	公衆衛生看護を学ぶ学生のためのケースメソッド演習の開発 <sup>5)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教員が母子、成人、高齢者、精神のケースの援助目標、ストーリー、健康課題を作成</li> <li>・ 保健師活動のイメージがつく</li> <li>・ 課題解決や自己効力感も向上</li> </ul>
技術	地域看護活動の技術獲得 <sup>6)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ グループダイナミクスについて理解</li> <li>・ 地区診断や家庭訪問、健康教育を行う視点や方法、過程を理解</li> <li>・ 保健師独自の専門性と役割の理解</li> </ul>
	保健師卒業時における技術項目と到達度 <sup>7)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教育者の方が保健師に比べて到達度を高く設定</li> <li>・ 卒業時到達度は保健師教育および現任教育に適用</li> </ul>
	実習体験を通して得られた学生の学び <sup>8)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市町村や保健所での特徴的な活動と生活者に対する援助などを学習</li> <li>・ 教員と指導者は学生が体験したことを学びへと結びつけるための意図的関わりが重要</li> </ul>
	実習で実施する健康教育 <sup>9)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ リハーサルを重ね主体的に関わる気づき</li> <li>・ 卒業時到達度においても健康教育は意義を有する</li> </ul>
	産業保健実習の成果 <sup>10)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 労働者の健康管理の実際を体感し、産業保健専門職の専門性の学習</li> <li>・ 労働安全と健康が確保される会社の取り組みの実際を学習</li> </ul>
実習	実習終了時における地域保健活動への関心度 <sup>11)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実習を通して保健師に興味をもった学生は実習終了時の関心度得点が高い</li> <li>・ 学生の気づきを大切にし関心を高める実習の充実</li> </ul>
	統合カリキュラムにおける地域看護学実習のあり方 <sup>12)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域の健康問題と活動との関連付けを学び、保健師をイメージ</li> <li>・ 演習の工夫や実習後の学びの共有が必要</li> </ul>
	実習後のレポート分析からみた学生の学び <sup>13)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生活者としての対象の理解、援助方法、連携・協働を学習</li> <li>・ 学生の自分への気づきと課題を学習</li> </ul>
	保健師の実践上の課題と連動させて実習を行うことの教育効果 <sup>14)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実践活動の充実に寄与するように単独家庭訪問実習を推奨</li> <li>・ 実習が保健師活動の充実や改善の機会とすることに教育効果</li> </ul>
	実習における実習指導の課題 <sup>15)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実習指導は負担と感じているが、自己成長へのつながりを実感</li> <li>・ 指導体制の構築と評価のフィードバック</li> <li>・ 教員と指導者との役割分担が必要</li> </ul>

## 3) 保健師技術

保健師技術は、地域看護活動の技術獲得<sup>6)</sup>と保健師卒業時における技術項目と到達度<sup>7)</sup>があった。地域看護活動の技術では、「グループダイナミクスについて理解し、地区診断や家庭訪問、健康教育を行う視点や方法、過程」の基本的展開方法を理解した上で実習に臨み、「保健師独自の専門性と役割の理解」を深めていた。さらに、保健師卒業時における技術項目と到達度は「教育者の方が保健師に比べて到達度を高く設定」しており、「卒業時到達度は保健師教育および現任教育に適用」できるとの結論であった。

## 4) 実習

保健師教育の文献の中でも「実習」の研究が多くみられ、「実習体験から得た学び」や「実習のあり方」、「実習指導者側の課題」がテーマとなっていた。実習体験を通して得られた学生の学び<sup>8)</sup>は、「市町村や保健所での特徴的な活動と生活者に対する援助などを学習」し、さらに、「教員と指導者は学生が体験したことを学びへと結びつけるための意図的関わりが重要」であった。また、実習で実施する健康教育<sup>9)</sup>からは、「リハーサルを重ね主体的に関わる気づき」を得ていた。産業保健実習の成果<sup>10)</sup>からは、「労働者の健康管理の実際を体感し、産業保健専門職の専門性の学習」を得ており、「労働安全と健康が確保される社会的取り組みの実際を学習」していた。

実習終了時における地域保健活動への関心度<sup>11)</sup>として「保健師に興味をもった学生は実習終了時の関心度得点が高かった」。また、統合カリキュラムにおける地域看護学実習のあり方<sup>12)</sup>からは、「地域の健康問題と活動との関連付けを学び、保健師のイメージができた」との結果であった。いずれの報告<sup>11),12)</sup>からも、「実習後の学びの共有が必要」との結論となった。さらに、実習後のレポート分析からみた学生の学び<sup>13)</sup>では、「生活者としての対象の理解、援助方法、連携・協働を学習」することができ、「学生の自分への気づきと課題を学習」し、関心を高める実習の充実が述べられていた。

実習指導側の報告<sup>14),15)</sup>からは、「保健師の実践活動の充実に寄与するように単独家庭訪問実習を推奨」したことにより、「実習が保健師活動の充実や改善の機会とするところに教育効果」があるとの結論となった。実習指導者は実習を「負担と感じているが、自己成長へのつながりを実感」し、「指導体制の構築と評価のフィードバック」や「教員と実習指導者との役割分担が必要」と述べている。

## 2. 保健師現任教育の現状

保健師現任教育の現状に関する文献は、研究タイトルおよび研究結果のキーワードから「新人教育」、「人材育成」、「専門能力」に分類された。さらに各分類の具体的な内容を表2に示した。

## 1) 新人教育

新任期の保健師の困難<sup>16)</sup>では「対象者との相談時における知識不足は先輩に相談し対処」していることが明らかとなり、大学教育において「幅広い学習が卒業活かされることを伝える」必要性があった。また、新人看護職の教育システム<sup>17)</sup>と新人保健師入職後1年間に経験した主観的達成度<sup>18)</sup>では、「主観的な達成感」は継続事例や多問題事例への支援から獲得し新人保健師は「与えられた内容をこなすのではなく自らの課題を考えながら学ぶ姿勢」と「どのように経験するかが重要」であり、「困難事例は支援を通して新人保健師が主体的に考え実践」できるようにする必要性が述べられていた。さらに、新任期保健師の個人・家族の支援能力向上のための研修評価<sup>19)</sup>では、「研修後、個人のみではなく家族を1つの単位として捉えが可能」になったことから「研修で強化する必要性が示唆」された。

## 2) 人材育成

人材育成では、プリセプターの役割認識の変化<sup>20)</sup>について「保健師としての意識変容と組織の一員としての意識変容」があり、「スタッフと育ち合うことや組織に関わる必要性を認識」していた。また、保健師育成のOn the Job Training (OJT: 実際の仕事から業務上必要な知識・技術・技能を身につける教育訓練手法) に対する指導者の意識と組織体制<sup>21)</sup>では「新

## 保健師教育と保健師現任教育の現状と課題

表2 保健師現任教育に関する対象文献と研究結果の概要

分類	タイトルと文献番号	研究結果
新人教育	新任期の保健師の困難 <sup>16)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対象者との相談時における知識不足は先輩に相談し対処</li> <li>・ 幅広い学習が卒後活かされることを伝える</li> </ul>
	新人看護職の教育システム <sup>17)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3年間の育成システムはOJTと研修から構成</li> <li>・ 与えられた内容をこなすのではなく自らの課題を考えながら学ぶ姿勢</li> </ul>
	新人保健師入職後1年間に経験した主観的達成度 <sup>18)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 主観的な達成感は継続事例や多問題事例への支援から獲得</li> <li>・ どのように経験するかが重要</li> <li>・ 困難事例は支援を通して新人保健師が主体的に考え実践</li> </ul>
	新任期保健師の個人・家族の支援能力向上のための研修評価 <sup>19)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研修後、個人のみではなく家族を1つの単位としての捉えが可能</li> <li>・ 研修で強化する必要性が示唆</li> </ul>
人材育成	プリセプターの役割認識の変化 <sup>20)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保健師としての意識変容と組織の一員としての意識変容</li> <li>・ スタッフと育ち合うことや組織に関わる必要性を認識</li> </ul>
	保健師育成のOJTに対する指導者の意識と組織体制 <sup>21)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新任者を等身大で理解しレベルに合わせた指導とOJT育成の職場風土の形成や外部支援体制が必要</li> </ul>
	リーダーシップ能力の自己評価の変化 <sup>22)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 職位が上がると研修の受講経験があるほど自己評価は高い</li> <li>・ 研修はリーダーシップ能力に対する自己評価を高める</li> </ul>
	若手保健師の力量形成上の課題 <sup>23)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自己教育力が大切</li> <li>・ 若手保健師は先輩保健師を活用し学習</li> <li>・ ベテラン保健師は「指導すること」から学習</li> <li>・ 保健師の専門性を養う組織体制づくりが必要</li> </ul>
	保健師の専門能力形成 <sup>24)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 活動から個人→家族→社会を捉え、確かな視点を育てる援助</li> <li>・ ベテランが新人を自信をもって育てる取り組みが必要</li> </ul>
専門能力	実践活動を自己評価し改善できる保健師の育成方法 <sup>25)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事例提供をする保健師はありのままを話す</li> <li>・ 事例検討会は現任教育の意義も高める</li> </ul>
	行政保健師の職務への自信と影響要因 <sup>26)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保健師の自信と職務の自信といった職場的要因が影響</li> <li>・ 事例や事業を検討して評価し合う職場の教育体制が重要</li> </ul>
	行政機関の保健師に求められる政策に関する能力と必要な保健師基礎教育の内容 <sup>27)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 住民の健康を念頭においた主体的取り組み</li> <li>・ 住民の奉仕者としての公務員の姿勢</li> </ul>
	現任保健師が認識している公衆衛生における現状変化と改善策 <sup>28)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 卒後教育体制の改善や制度変化に伴う保健師業務の変化</li> <li>・ 保健師の役割とモチベーションの再考</li> </ul>
	事例検討を活用した保健師現任教育で復興を支える実践力 <sup>29)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事例検討は情報整理とアセスメントの言語化</li> <li>・ 事例を組織内で共有することによる協力体制</li> </ul>
	保健師の家庭訪問実施に関連する要因 <sup>30)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市町村保健師は家庭訪問の自己評価が低い</li> <li>・ 家庭訪問はやりがいがあり重要な活動</li> </ul>

任者を等身大で理解しレベルに合わせた指導とOJT育成の職場風土の形成や外部支援体制が必要」と述べられていた。さらに、リーダーシップ能力の自己評価の変化<sup>22)</sup>については「職位が上がり研修の受講経験があるほど自己評価は高い」結果となり、「研修はリーダーシップ能力に対する自己評価を高める」結果となった。

若手保健師の力量形成上の課題<sup>23)</sup>では「自己教育力」が大切であり、若手保健師は先輩保健師を活用し、ベテラン保健師は指導することから学習」との結果が得られ、「保健師の専門性を養う組織体制づくりが必要」との結論となった。

### 3) 専門能力

保健師の専門能力形成<sup>24)</sup>では「活動から個→家族→社会を捉え、確かな視点を育てる援助が「ベテランが新人を自信を持って育てる取り組みが必要」となると言及している。さらに、実践活動を自己評価し改善できる保健師の育成方法<sup>25)</sup>では「事例提供をする保健師はありのままを話す」姿勢が必要であり「事例検討会は現任教育の意義を高めて」いた。

行政保健師について、行政保健師の職務への自信と影響要因<sup>26)</sup>では保健指導を基本とした対人サービスなどは「事例や事業を検討して評価し合う職場の教育体制が重要」、また、行政機関の保健師に求められる政策に関する能力と必要な保健師基礎教育の内容<sup>27)</sup>では「住民の健康を念頭においた主体的取り組み」や「住民の奉仕者としての公務員の姿勢」などを養うことが必要であるとの結果となった。

現任保健師が認識している公衆衛生における現状変化と改善策<sup>28)</sup>では「卒後教育体制の改善や制度変化に伴う保健師業務の変化」を「保健師の役割とモチベーションの再考」と捉えていた。事例検討を活用した保健師現任教育で復興を支える実践力<sup>29)</sup>では「事例検討は情報整理とアセスメントを言語化」し、「事例を組織内で共有することにより協力体制」ができる」と述べている。また、保健師の家庭訪問実施に関連する要因<sup>30)</sup>については、保健所保健師は現任教育の充実と事例検討会の実施などがある

が、「市町村保健師は家庭訪問の自己評価が低い」が「家庭訪問はやりがいがあり重要な活動」と認識している。

## V. 考察

### 1. 保健師教育について

保健師教育は実習<sup>8)~15)</sup>に関する研究が多くみられた。主に、実習後の実習記録から学生の学びを分析しており、学生は実習体験を通して「対象の理解、援助方法」や「地域の健康問題と活動との関連付け」を学び、「保健師活動のイメージ」を確立している。さらに、実習体験を通して保健師活動を実践する上で必要となる考え方や見方、技術を学んでいるといえる。

実習指導者側の報告<sup>14)・15)</sup>からは、「実習が保健師活動の充実や改善の機会とする」ところに教育効果が見出されるが、実習指導者は実習指導を「負担と感じているが、自己成長へのつながり」とも感じている。仲谷ら<sup>31)</sup>も学生からの質問で経験に頼りきった判断をしていることに気付かされ、意味や根拠を改めて見直すこともあり、自分達の看護を見直すよい機会の場合と述べている。さらに、実習指導をする上では「実習施設および学生との実習目的・目標の共有」が必要でもあり、大学の教員と実習指導者との連携の重要性が明らかとなった。また、実習指導者からは実習指導後の「評価のフィードバック」が期待されている。実習指導者には、大学側から「学生が実習から得た学び」などを報告する必要性が示唆された。

さらに、これらの実習が有効な学習機会となるためには、教員側の準備として実習前<sup>14)・15)</sup>には「教員と指導者との役割分担」や「演習の工夫や実習後の学びの共有」が求められている。学生への指導として、健康教育<sup>9)</sup>は「リハーサルを重ね主体的に関わる気づき」となっていた。仲谷ら<sup>31)</sup>は学生自身による健康教育の実施は住民の反応を直接肌で感じる体験と述べている。このことから、学生自ら住民に提供する健康教育を企画立案し、何度もリハーサルを重ねることは保健師の実習の意識づけとともに意欲を高めることにもつながるといえる。

保健師教育の一環である演習については、地域診断<sup>4)</sup>や事例展開<sup>5)</sup>の報告があり、ケースの援助目標など保健師の実践活動と結びついた演習の展開が「保健師活動のイメージづくり」につながったと考えられる。また、保健師に興味をもった学生は「実習終了時の関心度得点が高い」との結果がある。演習により保健師活動への興味を高め、保健師教育の集大成となる実習により関心が高められ、これまでの学びを有意義なものとする必要がある。

大学における保健師教育<sup>3)</sup>の報告からは、教育においても現任保健師と同様に「現場の地域保健活動および住民の生活の質の向上という目標から外れてはならない」とある。また、卒業時到達度は保健師教育および現任教育に適用<sup>7)</sup>との結論もある。保健師教育および現任保健師にとって同じ目標を持つことの重要性が見出された。また、保健師の教育内容の一部が「地域看護学」から「公衆衛生看護学」へ変更され、保健師教育の質の充実を図るとともに単位数が増加したことに伴い、保健師教育が卒業後の新人教育へと効果的に接続することができるより実践的な公衆衛生看護学実習の必要性が示唆されたと考える。

## 2. 保健師現任教育について

新人教育<sup>16)~19)</sup>では、いずれの報告からも新人保健師は「与えられた内容をこなすのではなく自らの課題を考えながら学ぶ姿勢」や「主体的に考え実践」することができるようにする体制が述べられていた。さらに、新人保健師にとって大学教育では「幅広い学習が卒業後活かされることを伝える」ことが重要との認識があり、保健師教育において卒業後を考慮した幅広い知識の提供の重要性が示唆された。

人材育成<sup>20)~23)</sup>では、保健師の育成やリーダーシップの役割を遂行するにあたり、「スタッフと育ち合う」ことや新任者を等身大で理解しレベルに合わせた「職場風土の形成」、さらに「リーダーシップ能力に対する自己評価を高める」ことが必要とされている。さらに、「自己教育力」を大切に「保健師の専門性を養う組織体制づくり」の必要が述べられていた。保健師育成の

役割が遂行できる職場環境づくりや共有の機会の確保、および、研修の機会の重要性が示唆された。

専門能力<sup>24)~30)</sup>では、制度変化に伴う保健師業務の変化は「保健師の役割とモチベーションの再考」の機会となっていた。また、事例検討会の意義として、「事例提供をする保健師はありのままを話す」ことが求められていた。保健師には、「事例をよりよく支援したいという姿勢」と「事例や事業を検討して評価し合う職場の教育体制」が必要とされていることが明らかとなった。これらは「事例を組織内で共有することによる協力体制」の構築が求められ、職場内におけるOJTや検討会の必要性が示唆された。

保健師の人材育成については、地域保健関連施策等の変化に伴い、施策が分野ごとに実施される中、総合的に施策を推進する上で、保健師には一層の連携調整能力の習得が求められており、このような能力を習得するための系統的な研修体制の構築が課題<sup>2)</sup>となっている。これら、保健師の人材育成の研修を企画・実施するに当たっては、都道府県による計画的・継続的な人材育成の支援・推進が今後も重要<sup>2)</sup>である。

また、「行政機関の保健師」は「住民の健康を念頭においた主体的取り組み、住民の奉仕者としての公務員の姿勢」が必要とされている。地域保健における課題を解決していくため、保健師に対する効果的なジョブローテーションも含めた人材育成の仕組みの構築が必要<sup>2)</sup>である。保健師には、「行政職」としての人材育成と、「専門職」としての人材育成の両方が必要<sup>2)</sup>である。

## 3. 保健師教育と保健師現任教育の課題について

保健師の実習では、学生が「保健師の実践活動の充実に参加するように単独家庭訪問実習」をすすめることにより、「実習が保健師活動の充実や改善の機会とするところに教育効果」があるとの結論となっていた。しかしながら、現任保健師は「家庭訪問はやりがいがあり重要な活動」であるが「保健所保健師は現任教育の充実と事例検討会の実施などがあるが、市町村保健師は家庭訪問の自己評価が低い」との報告もある。保健師にとって家庭訪問はコアとなる支

援技術の一つ<sup>32)</sup>であり、個人や家族を対象にケアを提供することに終わらず、地域全体に保健活動を展開する点で他の職種による家庭訪問とは専門性を異にする機能<sup>32)</sup>がある。この家庭訪問は学生にとって学びが深くなるが、一方では保健師にとって専門職としての自信のなさを感じる援助技術となっている。一つの援助技術からも地域の活動状況に応じた保健師の育成が体系的に推進されることが期待されるといえる。

さらに、新人保健師は「どのように経験するかが重要であり、困難事例は支援を通して新人保健師が主体的に考え実践」できるようにする必要性が述べられていた。大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告においては、看護学基礎カリキュラムは、就労後の新人研修へと効果的に接続することができる教育内容を考慮し、看護専門職としての発展につながるものである必要<sup>1)</sup>を述べている。学生の資質が変化している中、改正された指定規則の教育内容を充足し、看護専門職の基盤となる資質を獲得させ、長い職業生活のスタートラインに立てる人材を育てるためには何が必要なのか、各大学が学生の状況や教育環境等を考慮しながら主体的に検討することが重要<sup>1)</sup>である。これらのことから、大学における保健師教育から保健師現任教育までの連動した教育プログラムの構築が必要といえる。

最後に、本研究では、大学教育における保健師教育の現状と課題、さらに保健師現任教育の現状と課題、それぞれを研究対象とした文献から研究結果を得た。本研究の限界と今後の研究課題として、大学教育から保健師現任教育まで連動した教育プログラムを構築するにあたり、各時期の現状と課題を照らし合わせた結果を導き出す必要がある。このことが、体系的な保健師育成のあり方を見出すものと考えられる。

## VI. 結論

保健師教育については保健師の実習に関する研究が多くみられ、実習から学生は保健師活動を実践する上で必要となる知識や考え方、見方、

技術を学んでいた。また、教育においても現任保健師と同様に地域保健活動および住民の生活の質の向上という目標から外れてはならない。

新人保健師にとって大学教育では「幅広い学習が卒後活かされることを伝える」ことが重要との認識があり、保健師教育において卒業後を考慮した幅広い知識の提供の重要性が示唆された。

さらに、保健師の育成やリーダーシップの役割を遂行するにあたり、「スタッフと育ち合う」ことや「新任者を等身大で理解しレベルに合わせた職場風土の形成」、「リーダーシップ能力に対する自己評価を高める」ことが必要であり、保健師育成の役割が遂行できる職場環境づくりや共有の機会の確保、また、研修の機会の重要性が示唆された。これらのことから、大学教育から保健師現任教育までの連動した教育プログラムの構築が必要といえる。

## 文献

- 1) 文部科学省. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告. 2011. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm) (2015年11月2日参照).
- 2) 厚生労働省. 保健師に係る研修のあり方等に関する検討会中間とりまとめ. 2014. <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000069264.html> (2015年11月2日参照).
- 3) 末永カツ子, 瀬川香子, 鈴木和広, 他. 大学における保健師教育に関する考察 地域看護学実習の展開過程と学生の学びを通して. 東北大学医学部保健学科紀要. 2007; 16(2): 69-79.
- 4) 鈴木知代, 片山京子, 鈴木みちえ, 他. 地域での体験を重視した地域診断演習における看護学生の学び. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 2009; (17): 51-59.
- 5) 奥野ひろみ, 五十嵐久人, 高橋宏子, 他. 公衆衛生看護を学ぶ学生のためのケースメソッド演習の開発とその効果に関する研究. 信州公衆衛生雑誌. 2014; 8(2): 73-79.



- 6) 重松由佳子, 米村敬子, 兼武加恵子, 他. 地域看護活動技術獲得を目指した教育実践報告—保健師が行う独自の地域看護活動技術の育成にむけて—. 保健科学研究誌. 2009; 6:1-13.
- 7) 麻原きよみ, 大森純子, 小林真朝, 他. 保健師教育機関卒業時における技術項目と到達度. 日本公衆衛生雑誌. 2010;57(3): 184-194.
- 8) 下村聡子, 安田貴恵子, 酒井久美子, 他. 地域看護実習での体験を通して得られた学生の学び 市町村および保健所における実習に焦点をあてて. 長野県看護大学紀要. 2012;14:35-49.
- 9) 上平公子, 田島愛, 橋本廣子, 他. 地域看護学実習で実施する住民への健康教育に関する一考察. 岐阜医療科学大学紀要. 2015;9:71-80.
- 10) 上平公子, 堀希好, 橋本廣子, 他. 産業保健実習の成果に関する検討 製造現場からの学び. 岐阜医療科学大学紀要. 2013; 7:53-61.
- 11) 富田早苗, 横山美江. 地域看護学実習終了時における学生の地域保健活動への関心度とその関連要因. 日本公衆衛生雑誌. 2008;55(2):101-106.
- 12) 石田千絵, 河原加代子, 高石純子, 他. 統合カリキュラムにおける地域看護学実習のあり方 保健所・保健センターにおける4年間の実習の経過報告. 日本保健科学学会誌. 2004;7(3):139-147.
- 13) 片岡三佳, 普照早苗, 松下光子, 他. 地域基礎看護学実習終了後のレポート分析からみた学生の学び. 岐阜県立看護大学紀要. 2008;8(2):3-10.
- 14) 坪内美奈, 松下光子, 森仁実, 他. 保健師の実践上の課題と連動させて実習を行なうことの教育効果におよぼす意味. 岐阜県立看護大学紀要. 2009;10(1):3-11.
- 15) 白木裕子, 浦橋久美子, 齋藤澄子, 他. 地域看護学実習における実習指導の課題 保健師の評価を受けて. 茨城キリスト教大  
学看護学部紀要. 2013;4(1):57-65.
- 16) 頭川典子, 安田貴恵子, 御子柴裕子, 他. 学士課程卒業後の保健師が新任期に感じる困難と対処状況. 長野県看護大学紀要. 2003;5:31-40.
- 17) 田久保尚子. 中途・新卒産業看護職は必読! 産業看護のいろは 新人看護職の教育システム. 産業看護. 2010;2(3):200-204.
- 18) 関山友子, 青木さぎ里, 千葉理恵, 他. 市町村における新人保健師の入職後1年間に経験した実践内容と到達目標の主観的達成度. 自治医科大学看護学ジャーナル. 2014;11:35-43.
- 19) 鈴木知代, 佐藤圭子, 平井敦美, 他. 新任保健師の個人・家族支援能力向上のための研修の評価. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 2012;(20):11-20.
- 20) 嶋津多恵子, 麻原きよみ. 保健師がプリセプターの役割を担うことによる認識の変化. 日本看護科学会誌. 2014;34:330-339.
- 21) 佐伯和子, 大野昌美, 大倉美佳, 他. 地域保健分野における保健師育成のOJTに対する指導者の意識と組織体制 新任者教育の実践を通して. 日本公衆衛生雑誌. 2009;56(4):242-250.
- 22) 河原田まり子, 佐伯和子, 和泉比佐子, 他. リーダーシップ能力の自己評価の変化から見た保健師指導者育成プログラムの効果. 看護総合科学研究会誌. 2007;10(3):13-24.
- 23) 小川智子, 齋藤茂子, 小田美紀子. 若手保健師の力量形成上の課題についての考察 現任保健師の認識分析. 日本医学看護学教育学会誌. 2011;(20):49-54.
- 24) 高尾茂子. 地域保健行政で働く保健師の専門能力形成の要因分析 保健師の経験“語り”調査から. ヒューマンケア研究学会誌. 2013;5(1):47-54.
- 25) 松波実智誉, 北山三津子. 実践活動を自己評価し改善できる保健師の育成方法の検討 事例検討会を充実させる取組み. 岐阜県立看護大学紀要. 2015;15(1):77-86.

- 26) 小川智子, 中谷久恵. 行政保健師の職務への自信とその影響要因. 日本公衆衛生雑誌. 2012; 59(7):457-465.
- 27) 平野美千代, 佐伯和子, 上田泉, 他. 行政機関の保健師に求められる政策に関する能力と必要な保健師基礎教育の内容 市町村に勤務する保健師管理者への面接調査から. 日本公衆衛生雑誌. 2012;59(12):871-878.
- 28) 湯浅資之, 池野多美子, 請井繁樹. 現任保健師が認識している公衆衛生における現状変化とその改善策に関する質的研究. 日本公衆衛生雑誌. 2011;58(2):116-128.
- 29) 中島誠子. 看護師が取り組む被災地の復興(報告3) "事例検討" を活用した保健師現任教育で復興を支える実践力をアップ. 看護. 2015;67(3):56-59.
- 30) 大西章恵, 近藤明代, 羽原美奈子. 保健所保健師と市町村保健師の家庭訪問実施に関連する要因. リハビリテーション連携科学. 2013;14(1):30-38.
- 31) 仲谷美樹, 中村久恵, 鈴木恵理子, 他. 看護臨地実習施設が本学看護学部の教育に求めるもの 浜松市の看護臨地実習受入れ施設としての現状とこれからの看護教育に求めるもの. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 2011;(19):3-9.
- 32) 守田孝恵. 地域保健活動のツール 家庭訪問. 荒賀直子編. 公衆衛生看護学.jp. インターメディカル ;2015. 176-188.

# The Current Status and Problems of Public Health Nursing Education and Career Development of Public Health Nurses

---

Kayo Numata

Department of Nursing, Ashikaga Institute of Technology

## *Abstract*

**【Purpose】** To clarify the present status and issues in public health nursing education and career development of public health nurses as source material for investigating methods of public health nurse development.

**【Method】** Literature from 28 sources related to the present status and issues in public health nursing education and career development of public health nurses was reviewed.

**【Results】** In university public health nursing education, students were learning the required knowledge, ways of thinking, and skills through engagement in public health nurse activities from practical internships. However, there is a recognized need to convey to newly employed public health nurses that acquiring a wider-ranging university education can be utilized after graduation. Studies have suggested the importance of providing a broad education in consideration of the students' career after graduating from a public health nursing education course. In terms of career development of public health nurses, studies suggest the importance of creating working environments where career development education is implemented, and the workplace culture sees newly employed public health nurses as they are in terms of their education level, as well as the importance of information sharing and training opportunities.

**【Conclusion】** The aims of public health nurse development are to improve the quality of local residents' lives and community health activities. Thus it is necessary to construct an education program that integrates all stages of education from university education to career development of public health nurses.

**Key Words:** public health nurses, public health nursing education, career development of public health nurses, human resources development